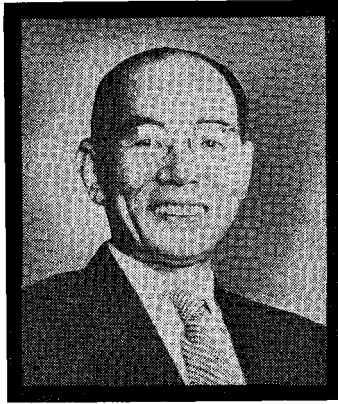


故 名 誉 会 員 近 藤 博 夫 氏 を し の ぶ



近藤博夫氏が亡くなった。

訃報に接してすぐ思い浮べたのは、故人に大変失礼かも知れないが、近藤さんの裸踊りであった。関東大震災の前後であったと思う。東京で開かれた京大土木会で近藤さんに初めてお会いしたとき、氏は当時山口県の技師であったが、宴にぎわうにつれ、興の乗るにしたがい、下ばき一枚で元気いっぱい、裸踊りをはじめられたのである。そのときが初対面の私は、びっくりしてただ見とれていた。

多芸、元氣潑刺、小柄な身体に生命力の満ちあふれた人であった。天性わけへだてのない明朗闊達な性格が、初対面から人の心をなごませ、旧知の感を抱かせる人であった。いきなりこんな思い出話を始めたことを、亡き近藤さんどうかお許しください。そのときの印象があまりに強く、豪放磊落なあなたの生涯は、人前を飾らぬあの裸踊りの精神につらぬかれているように私には思われるのです。

近藤さんは大正3年京都帝大土木工学科を卒業された。大学は私の二年先輩になる。大正8年、大阪府に入れ、以後、土木技師として、大阪府、山口県、三重県の土木課長を歴任された。大正15年、大阪市に転じ、土木行政の第一線で活躍されたが、昭和4年、港湾部長に就任、大阪港の修築第二次計画の実行に着手、昭和7年、公職を辞して大林組に入社、同社の常務取締役など要職につかれ、以後、終戦の年まで民間土木業界で活躍された。

土木学会では、昭和5,6年関西支部商議員、6,7,8,9年同幹事長、21年関西支部長、36年からは名誉会員として、学会の発展に貢献された。

昭和22年、戦後初の公選市長統一選挙があったとき、氏は大阪市長に立候補された。戦災で焦土となった大都市を復興するには土木技術者の力が必要だったのである。大阪市では近藤さんが立候補し、神戸市では私が立った。選挙戦のさなか、近藤さんはたえず私の方へ電話をかけてこられ、私の方からも西宮のお宅へ電話してたがいに励みがあった。快活な先輩の激励は千万の声援より心強く感じられた。選挙の結果、近藤さんは当選され、戦後初の公選大阪市長としてさっそうとデビューされた。私は一敗地にまみれたが、「力を落とすことはないよ」と肩を叩くように激励して下さり、一週間後、私が参議院議員に当選すると、ご自身の当選以上によるこんでくださったのである。

大阪市の復興、大阪港の修築、そして昭和25年9月、大阪一帯を襲ったジェーン台風による大被災とその復旧など、氏の大阪市長在職4年間は、戦後の混乱と窮迫の中で新しい市政が発出し、そして、復興の基礎を定める多事にして多難の年であった。今日、整備された大阪港がその機能を十分に発揮しているのは、当時、氏が強力に推進された大阪港修築10ヵ年計画のたまものである。とくに、ジェーン台風被災後、氏はすでに健康を害しておられたが、それと關って、百数十キロにおよぶ大防潮堤の建設を計画、同時に大阪港背後地の盛土計画をすすめられた。昭和36年秋、第二室戸台風が大阪を襲ったとき、それは効果を発揮し、大阪をみごと災害から守ったのであった。

技術者であったが、技術一本槍の不粹な人柄ではなく、大阪市長就任後いち早く、市民の声を市政に反映するため全国に先がけて公聴課を設置された。わけへだてなく声を聞いて、できることはやる、できぬことはできないという近藤さんのざっくばらんな人柄が、市民・職員を問わず衆望を集めたのである。

市長在任中、不幸にして病に倒れられた。以来十数年、おおらかな氏にとって、ひとしおつらく長い期間であったと思う。つぎの神戸市長選に私が当選し、あいさつにお伺いすると、病床の近藤さんは涙を流して喜んでくださった。大阪・神戸と所は違っても、近藤さんの驥尾に付し、技術者出身市長として恥かしくない業績を残そうと誓い、それをお約束したのである。その近藤さんも今はない。淋しさをおおうことはできない。

【神戸市長 原口忠次郎・記】